

アメリカン・スパニッシュの特性 (二)

花 村 哲 夫

第八輯の小論に於て、Standard Castilian と American Spanish との間には可なりの相違があり、この相違について述べたのであるが、今回は前回触れなかつた音声的体系や形態に重点を置きつゝ統語法や単語に就ても触れ、前回の補足を試みることにする。

(1) 音 声 的 考 察

Am. Sp. に於ける、二つの重要な特徴は seseo と yeísmo である。seseo とは *sesear=pronunciar la ce como ere, por vicio o por defecto orgánico.—Pequeño Larousse Ilustrado* とある通り θ と発音すべき ç. z. s. を一様に s と発音することを謂うのである。この現象は中南米一般に認められる。但し θ の発音を一般化している Peru に於ける少数のアメリカ土人を除く。南方スペインに於ては、seseo が一般であるが、逆の誤りである ceceo = *ponunciar la s como c por vicio o por defecto orgánico—Diccionario de la Lengua Española.* つまり Lisping のことであり、この「舌足らずの発音」と併行して行われている。

換言すれば ceceo と seseo は音節の始まりに於ける、s. ç. z の発音に適用が出来、Sp. の場合に於ては、母音の間に挟まれる場合も含む。音節の終りに於て、は此等の子音は通例、氣息音となり、氣息音は部分的にしる、全般的にも、次の子音の特徴を帯びる。従て mismo は mihmo 又は mimmo (m は voiceless h の名残りとして unvoiced m を表わす) となり usted は uté と迄なり得る。

もう一つは yeísmo = *defectos que consiste en pronunciar la elle*

como ye.—Diccionario de la Lengua Española で、つまり e^he と発音すべき ll を y と発音することである。例えば caballero を cabayero と発音することで、これは vulgar Sp. に於ては、スペインの何処にでも存するのであるが、Am. Sp. に於ては野卑な発音でなくて普通の発音である。メキシコの Atotonilco 地方に於ては、元来の音を保持している。そしてこの音は、コロンビヤ、ペルー、北部及び西部チリーの高原に於ても見出される。或る場合に於ては、Quechua 及び Mapuche 族に存在する ll の音が Sp. の音を保持するのに役だつた。それは疑いもなく、その普通の発音の儘、征服者達に依て南米に持つて来られたのだが、恐らく y 音が伴つて来たものであり Mozarabic 時代迄遡ると伝えられている。この段階は更に進んで、アルゼンチンでは ll は Cuyo, Córdoba 地方では y になり、ブエノス、アイレスでは ^vz j 音となつた。

以上述べた此等の二つの変化の結果は c, z, s, ll, y の五つの文字に依る四つの Sq. の音は、中南米に於ては、二つになることになり、従つて話し言葉と綴字との間に永久的な割れ目を作ることになる。従て発音が極端に訂正せられるから綴りの上に於ても誤りが出来る。ensayando に対し enzallando となつたり Guayaquil に対し古文書では, Guayaquil になつたりなつたりする。

中南米に持ち来たされた s は疑いもなく、cacuminal voiceless sibilant [s]. 無声の舌尖後屈に蓋音の歯擦音 [s] であつて、Nahuatl や Mapuche の借用語に於て、証明されている。(Nah; xenola, Sp. señora, Map. chumpirú, Sp. sombrero) この子音は容易に同質の口蓋音、特に j [z] と混つてしまつた。従つて「はさみ」という Sp. には tijeras と tiseras と二つありそして、この過程は vulgarism に於て一層極端になり frisoles に対して frijoles となる型となつて中南米に見出される。逆に j の代りに s となる場合がある。例えば reloj に対して relós; reló, almofrej に対して almofrós となる。然し中南米に於て、現在普通であると云われている s 音は、舌端を下方の歯に休止させ、口蓋の方へ上げないで発音する dorsoavelolar s 音である。それ故 s を c, z と融合せしめるのは舌端を、このように下げるためである。音節の最後で

は末尾の音節は極く普通に強勢のない氣息音 *h* に移つてゆく。そして有聲子音の前では、ほんの少し発音される。そして慣例に依て *h* 又は *j* に依て表わされる。例えば *no maj=no ma=no más, vamoh a quejar, loh enamorao* (los enamorados) 等。「私は貴方々に、ジャガ芋を持つて来てあげよう」はチリーでは *le traíamos papas* が *le tréjamoh papah, senōrita* となる。メキシコ、コロンビア、ペルーの *Sp.* の特徴は *s* 音が保存されていることである。処がその反対に此等の国々の海岸地方及びチリー及びアルゼンチンに於ては、氣息音になつてしまつた。一度それが消失すると *está escribiendo* に於けるように *hiatus*(母音接続)に依て表わされさえしないで、チリー人の云う *ontá mi tío* (*donde está mi tío*) の様に縮約されるようになる。

ラテン語の *f.* は一般に氣息音の *Castillian h* にとつて代られ、この氣息音は *Am. Sp.* の特徴となつた。一方 *español correcto* は、その音を消失してしまつた。それは慣習的に *j* に依て表わされているが、きしる軟口々蓋音の「X」ではない。(例、*jarto Sp. harto; jijo Sp. hijo*)。然しこの氣息音は *r* 及び *u* と關聯してさえも起り(例、*ofrecer, afuera* の代りに *ojrecer, ajuera*) 又 *f* が存在しない時ですら (*irme* の代りに *jirme*)、そして単語が *Sp.* に於ける最近の *latinism* である時起る。(例、*fácil* の代りに *jácil*)。

子音が省かれたり交替する事も亦、*Am. Sp.* に於ては非常に普通に起ることである。即ち *bue=[we`hue=güe* から *buevo=güevo=huevo* (玉子)、*güele=huele* (においがする) となり、従つて *oler* (においを嗅いでみる) は *goler* となる。子音の *l, r, d* は *dentro-alveolar regio* (舌の先を歯茎につけて発音する領域) に属する。そして通俗に代り合う。即ち *repué<después, ran<dan, rise<dice estnrio<estudio, culandrero<curandero* (藪医者) *candilato<eandidato, ardil<ardid* 等。

母音の中に挟まれる *d, g, r.* は消滅する傾向がある。即ち *ehpeasa<despedaza, hería<herida miaja<migaja, pa<para pal<para el, pasque* 及び *paez que<parece que, señá<señora*。そして末尾 *r* は *señó* に於ては消失する。語頭の *d* は時々、接頭語の *des-, es-* 混同に依て時々消滅する。時に

は breath-group の範囲内に於て、母音の間に起るからして消失する。例えば ehpeasa < despedaza, etráh < detrás, ilaten < dilaten 等。syntax の為に d が消滅する特徴ある場合は sombrero e paja < sombrero de paja に於て見られる。

Accentuation に関して母音接続に於て母音の削減は Am. Sp. に於ける特徴である。即ち páis, baúl, atáud < país, aaúl, ataúd 等。academia のように -ía, -ia に終るギリシヤ系の語の accentuation に関しては少々、ためらいがある。英語の cannot の not, pritheo の thee などの enclitics (前接語の) accentuation は Argentine Sp. に於て顕著である。(例、vamonós, dijolé)

(2) 形態及び統語法

Sp. に於ては名詞の語尾変化は非常に簡単であるから誤つた用法は余りない。Doubb Plural は通俗に起る。pieses < pie. ajises < ajíes 又 複数が不可能な言葉にも用いられる。例えば Tomo mis onces. (私は十一時に食事をする)。又副詞を複数にした exclusives や inclusives もある。文法的、性の考え方は混乱していて Am. Sp. は性の変化を利用して、便利な新しい単語を造り出した。例えば cabra から cabro = standard Sp. cabrón を、oveja から ovejo = standard Sp. carnero, 男の証人の testigo, 罪人の reo から tertiga, rea を、tigre から tigma (Old. Sp. にはある) を造り出した。

代名詞は少々変更をした。nos は屢々 mos となり nosotros は mosotro_s となる。New Mexico に於ては更に混乱して nosotros は lohotroh となる。例えば la casa de lohotroh (私達の家)。再帰動詞の se は不人称代名詞となる傾向がある。例えば cuando uno es poeta の代りに cuando se es poeta となる。そして他の再帰動詞の代りに用いられる傾向がある。一方 dative の le は les の代りに、漠然と言及する為に利用された。例えば le dice adiós a las garzas que pasan (彼は通りすがりの青鷺に、さようならを云つた)。これは Redundant Indirect "le" と謂うてもよい。この Redundant "le" の用法は、複数の Indirect Object を予想したものであつて、O. Sp. に於ても

Mod. Standard Sp. に於ても、稀でないことはないが、Am. Sp. に於ては、遙かに多い用法である。この pleonastic “le” の用法は、時々句に丸味をつける為、換言すれば文句を手際よく仕上げるに役立つ単なる expletive particle であることもあり、時には副詞的、力を持つこともある。従つて文法家が、この le を les の誤りと、断定するのは行き過ぎであると考えられる。尚一つ二つ例を挙げれば

Cuídese mucho y déle recuerdos a los viejos. —Lynch.

Yo no le temo a las ideas. Le temo, sí, a los decretos. —Arango Villegas.

関係形容詞の cuyo は消失する傾向にある。礼儀の代名詞は非常な変化をした。二人称の親しい形である tú は、Am. Sp. では大部分消失して vos が主格単数であり、直接及び間接目的格は te であることは、前輯で詳述した通りである。代名詞の面白い例では、動詞の複数記号が位置を間違つて置かれることである。これは命令形として用いられた、第三人称複数動詞についたところの enclitics として代名詞に —n を添加することである。例えば hágamen <háganme. siéntensen, sientesen <siéntense 等。se lo の代りに lo に s をつけて se los とすると同じ理由で n を追加したものである。n 音が第三人称動詞に対する複数の感じを満足させるのであらう。この enclitic ‘—n’ は複数の —n に依るのみでなくて Imperfect Subjunctive の語尾の—sen (hablasen, tuviesen) に依ても影響を受けており、終に語の中の n は余分であるとして脱落した。猶複数の —n は時々、不定冠詞についた enclitic 代名詞につけ加えられ irsen <irse となり又動名詞にさえついて esperándomen とさえもなる。

代名詞の用法の中で注意を要すべきは不定の “uno” である。Yo の代りとして、uno を使うことは Sstandard Sp. に於けるよりも Am, Sp. に於てより普通に使われている。

Yo después de un güen tirón / en que uno se daba maña.—Martín Fierro.

Ella no es como uno. —Fabián Dobles.

英語でも非文法的ではあるが、全く **I** を用う可きところに **one** を代表することがあることも、Am. Sp. の用法と同じで興味深いことである。(e. g. **One let it paso, for one did not want to seem mean.** 私は卑劣だと見られたくなかつたので、その儘放つて置いた)

助動詞の中で注意すべきは、**mandar** である。**servirse (=please)** の意味に用いられる **mandarse** の用法は通俗的に南米の諸地域及び中南米に残存していて、**entrar, sentar, apear** 等と共に、用いられている。(例えば **mándese entrar=please come in**) 又アルゼンチン、チリー、エクアドル等に於ては **mandarse cambiar=irse, marcharse**. 出て行け、という表現がある。**ser, ir, venir** の様な、動詞の進行形は標準として稀にしか用いられない。然しながら O. Sp. に於ては、そうでなくて **id yendo, iremos yendo, vámonos yendo** 等のような形があつた。そしてその中には **finite form** と同じ動詞の動名詞が進行的要素を強調するために一緒に立つていたので、この古い用法が一般的及び粗野な言葉に於てでなく、より教養ある人々の間に於ても残存している。大抵の文法家達は、この用法を非難しているけれ共、古い用法の名残りと思えば非難するには当らないと考えられる。

種々の不変化動詞、**cada, nada, recién, hasta, entre, donde** 等は、中南米に於て独創的な用法を造り出した。**cada nada** (ほんの僅か)、**hasta cada rato** (少し経つてから; らきに) **él no viene** (彼は全然やつて来ない)。標準 Sp. に於て **recién** は形容詞又は分詞の前に来る新しく結婚した意味の **recién casados** に於ては副詞として用いられるが、其の場合に於ては **recientemente** が用いられるが南米に於ては左様ではなくて **recién que llegó** (彼が到着するや否や) は標準 Sp. の **apenas, no bien** に相当する。この **recién** は **recientemente** の **apocopation** ではなくて、ラテン語の **recēns**, **-tem** から出た **apocopated form** であつて、“新しく到着した” “新鮮な” という意味で、この用法はスペインに於ては廃れたが、Sp. Am. の各地に於ては、大いに発達し **recién** (粗野な形は **ricién**) では、お互に重複するが三つの意味

を加えた。(イ)英語の *just; a short time ago* で *llegó (ha llegado) recién = recién llegó (ha llegado)* で Standard Sp. では、*acabo de llegar (llegó hace poco tiempo)* と言う。recién は *redundantly* に用いられる。(e. g. *recién acabo de llegar = Standard Sp. acabo de llegar.*) (ロ)英語の *only, only then, not before* に相当する (e. g. *recién hoy = Standard Sp. sólo hoy*) (ハ)英語の *no sooner……than: lo vi recién (que) llegó = Standard Sp. lo vi apenas llegó.* 以上、三つの意味の中で(ロ)が一番普通である。

又 *hasta* は *Hasta ayer comencé a trabajar* (昨日迄は、私は仕事を始めなかつた) に於ては、否定の意味を含み、*entre más* は *mientras más* の意味を持ち、*Entre más bebe más sed le da.* (彼は飲めば飲む程、喉がかわく) の様に使われる。チリーに於ける *donde* は「……方」の意味を持ち、*donde mi tío* は「私の叔父の宅で」の意味となる。

間投詞に就て言語学上、興味あるのは、*amalaya* である。南米の各地に於て用いられている慣用語法の *mal haya* は単語の改良的傾向を示すものであつて、語義的発達珍しい例である。元来、呪いを述べるために用いられたのであつたが段々希望を表わす反対の意味を表わすようになった。*mal haya* の元来の意味は「呪はれてあれ」であつた。従つて其の反対の「幸あれ」は *bien haya* である。動詞は其の主語と数に於て一致した。例えば *¡ mal haya él ! ¡ mal hayan ellos !* それから徐々に動詞は不変になり、元来の主語は目的と考えられるようになった。即ち *¡ mal haya ellos ! ¡ Bien haya ellos !* となり終に *mal haya* は *maldito* (呪はれた) の意味の *malhaya* となり、そして *mal haya ellos + malditos sean ellos > malhaya sean ellos* の二つの構文の混成を経て、*ser* の假定法と共に、文章を組立てることになった。この構文は元来は社会的地位の低いものの中に、用いられていたが、遂に教養ある階級の人の間にも透徹したが、文法家達に依て受け入られていない。

次に *mal haya* は名詞を伴う *¡ ojalá tuviera !* に等しい願望的不変化詞として、用いられるようになった。(e. g. *¡ malaya una guitarra !* ギターが

あればよいがなあ!) 即ち話者は最も必要な時に欠けている目的物を呪い、間接的にそれが手元にあればよいがなあという、気持を表わす事になる、綴字は *ah malhaya, ah malaya, amalaya* 等、種々の形がある。

¡malhaya un buen vino para tan rica cena! —Bonilla Ruano.

(こんな立派な夕食には甘美な葡萄酒が欲しいなあ!)

この *¡ojála tuviera!* や *¡quién tuviera!* の意味の *¡mal haya!* *¡ah mal haya!* の用法から *ojalé+* 動詞、即ち *bien haya* の意味に等しい *ah malhaya+* 動詞の形が出来て来た。間投詞の *ah* を接頭語につけて新語の *amalaya* が発生し、この *amalaya* は *ah malhaya, amalhaya, ah malhaya* 等の種々に綴られる。

例、*Amalaya yo padiera.* (私に出来たらよいがなあ)

Amalaya me saliera bien una idea. (よい考えが出てくればよいがなあ)

(3) 単語

Standard Sp. と Am.Sp. との間の重要な違いは単語の面に於て一番起る。この理由は中南米の土着インディアンの、単語を大いに利用したからである。しかしこれは新しい言葉の唯一の源ではない。中南米への入殖者達は、新しい島や植物に Sp. の名前をつけた。従つて *gallinaza, jilguero, níspero piña, ciruela, madroño* 等、其他の名称は、スペインと南米とスペインとでは違つたものを指す。こういうた工合に、スペインでは冷たくて雨の多い冬の季節である *invierno* という単語が、南米ではたとえ夏に起つても雨季のために冬という *invierno* という単語を使つている。(invierho = rainy season in countries having no astronomical seasons, as in the tropics—Cuyás Dic.)

古語 (Archaism) は非常に多い。たとえば *entrar* (Mod. Sp. *entrar en*), *es muerto, es nacido* (Mod. Sp. *ha muerto, nacido*), *vido* (Mod. Sp. *vió'*), *truje* (Mod. Sp. *traje*), *pararse* (Mod. Sp. *levantarse*) 等で南米で使われている *párese y camine* (起きあがつて歩け) というのは、

Standard Sp. から考えると“立ち止まつて歩け”となるから、おかしい訳である。dende=desde, topar=encontrar, mercar=comprar, duce=dulce, recordar=despertar, 等で entierro=tesoro oculto は宝が昔、埋められていた時代の名残りである。cangilón は車の轍のことで十六世紀に用いられた、ひだえりのしわよせに似ているからである。

開拓者達は、長途の航海をした後、南米大陸に着いたのであるから彼等は船員達の使う専門語を拾いあげた。即ち amarrar una corbata (ネクタイをしぼる。元来は amarrar un barco のように船を停泊させることであつた)、flete (荷物>馬) caramanchel (甲板の昇降口>小屋) trincar (何か物を、しつかりと、くゝりつける>人を身動き出来なくさせる) vientos (針路>張り綱)。

スペインの高原の páramo=tereno desierto, elevado y sin vegetación という単語を、アンデス高原へ移したことは自然である。アンデスの高原は雪と雨を始終蒙っているから páramo という単語は llovizna=drizzle という意味が出来、従て paramar=lloviznar=to drizzle という意味が出来た。emparamarse=to shiver with cold=arrecirse の意味に使われる。火山は火を噴き出すのみならず、あらゆるものを、ひつくりかえす。従つて volcar=to upset<desvolcanarse=derrumbarse (真逆さまに身を投げる)、temperar は La edad tempera las pasiones のように“和げる”の意味に用いられるが Am. Sp. では「転地」の意味に用いられる。(=mudar de aires. cf. salir a temperar). olear は「臨終の際、聖油を塗る」であるが Am. Sp. では「洗礼を施す」barranca=ravine; cliff—Cuyís Dic. とあるように、上から見下ろす時には山峡となり下から見上げる時はがけとなる。従つて despeñar a uno de una barranca.—Cervantes は誰かを、がけ、から突き落すことであるが Mod. Sp. では「山峡へ」の意味にとつて、en una barranca という。montaña と monte は山を意味するばかりでなく、山に生える bosque (雑木林)をも意味する。

スペインのアンダルシア地方では señorito, señorita に相当する niño,

niña が子供のみに限らず、如何なる年齢の未婚の者にも適用される。この習慣は南米に於て残存している。特に *señorita* は、時々既婚婦人や、未亡人に迄も使われる。エクアドル や コロンビア等に於ては *niño, niña* は時々或る一世帯の主人や主婦達を呼ぶのに用いられる。

Sp. Am. では c. s. の区別が発音上、失くなつてしまつたから *homonymy* (同音異義) を避けるために新しい単語が造り出された、例えば *cocer* (料理する) *coser* (縫う) であるから *cocinar* (料理する) を造り、*cebo* (馬糧)、*sebo* (獣脂) であるから馬糧を *ceba* にし、*caza* (狩りをする)、*casa* (家) から *cacería* (狩猟) を造つた。

隠喩にも南米的なものを造つている。例えば *echar pólvora en gallinagos* (アメリカ秃鷹に弾丸を打ちこむようなもの) から「無駄骨折りをする」意味になり *a la pampa* (大草原にて) から「戸外で」、*ver gatos ensillados* (鞍をつけた猫を見る) から「目がくらむ」、*achicar a uno* (人を減らす) から「人を殺す」、*machetear* (中南米土人の用いる刀で障害物を切り開いて進んで行く) から「忍耐する」意味となつた。

通俗語源に基いて出来たものには、*vagabundo* から *vagamunds*、*comandante* と *comendar* から *comendante* が出来た。接頭語 *des-* と *es-* は野卑な言葉に於ては、混同し勝ちである。そして接尾語 *-ear* 及び *-ecer* は殆んど区別なしに用いられる。(e. g. *florear, florecer*) そして *-ear* は *peor* から *pior* となるところの音声上の短縮の過程に依て *-iar* 方へ移りつゝある。(完)